

古代における銀錢の流通について

秋 山 義 一

は し が き

我国の奈良朝より平安朝にまたがる西暦六百八十年頃から九百五十年頃までの間流通していた王朝十二錢⁽¹⁾についてもまだ十分に研究せねばならない問題が残っているが、ここでは私は王朝十二錢—銅錢—のことはさておいて、この銅錢にさがけて使用—たとえその用途が貨幣本来の職能からはなれていたとしても、——されたところの銀錢の問題⁽²⁾について、いつ頃から流通したか、又その用途についても、少しばかり解明して見たいと思う。

- (註) (1) 小葉田淳「上代貨幣流通史」更に近著である「日本の貨幣」について参照せられたい。
(2) 最近この問題について弥永貞三氏が「奈良時代の銀及び銀錢について」という論文を発表せられている。

一、銀錢のおこり

銀錢が最初に我国の文献に見えるのは、顯宗紀二年冬十月癸亥の記事即ち

宴群臣、是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野

である。然しこれが「後漢書」明帝紀第二卷の顯宗孝明帝紀永平十二年の

是歲天下安平、人無徭役、歲比登稔、百姓殷富、粟斛三十、牛羊被野

の記事に根拠をおくことは「日本書紀通証」によって明かであるが、横山由清氏はこれについて

顕宗紀の文は「後漢書」の文を潤色したるものなれど、稻斛銀錢一文はその実を伝えたるものなり。(1)

と述べ、又日本商業志において近藤芳樹氏は「四夷事略」を引用して「断じて錢貨行わる」と結んで居り、菅沼貞風氏も大日本商業史において「魏志」を引用して

すでに鉄貨あり、顕宗帝の世に銀錢を鑄造せしは順序なり。

としているのである。このことは「大日本史食貨志」に見える次の記事とも関連して考えなければならない。

於是韓人朝貢。首献金銀。故称三韓曰銀郷、又曰金銀蕃国。貨幣之興。蓋始于此。顕宗帝時、銀錢始見。

又これについて、法学博士故滝本誠一氏は源恒の著によるという「秘庫器録」の古秩書によって、

日本紀の文は後漢書に模した修飾の文であつて、此の当時実際に銀錢など通用していたことなしといふのであるが、此の秘庫器録に引証する秘府略の本文が正しくあつて、器録編製の際、帝室の秘庫に載せられた銀錢が三十枚あつたこととすれば、⁽²⁾ 顕宗紀の稻斛銀錢一文と必らずしも修飾ばかりではなく、事実銀錢があつたに相違なかるべし。

といわれている。この「秘庫器録」という古秩書は嘉元元年（西暦一三〇三年）に金沢文庫で写しておいた古写本を照井璞平という私学者が安政六年に金沢文庫から写しておいたものを更にその門人の斎藤美隆が描写したもので、これを底本として日本経済大典第一巻の中に滝本博士がおさめられているのであるが、滝本博士のいわれるとおり、斎藤美隆は信頼出来る人物であるとしても「秘庫器録」の内容について史料的价值があるかどうかについては疑わしいものといわなければならない今日、又金沢文庫に原写本が失われて発見することが出来ない今としては、この事より顕宗紀記事を云々することは難かしいと思う。

又法学博士内田銀藏氏はその著「日本通貨史の研究」⁽³⁾の中において

学者がこの文を「後漢書」の成文を修飾したるものと認めながら、稻斛銀錢一文はその実を伝えたるならんと思考するは、粟斛三十とあるを改め、中国の本部には当時銅錢あるも、さらに銀錢通用のことなきをもってするならん。

としながらも最後には、

余輩は此等学者と所見を異にす。即ち余輩は上古の時代に於て金属通貨の通用を確実なる事実と認むること能はざるなり。

と結んでいるのである。

最近田中卓氏は「稻斛銀錢一文」の記事は日本書紀が編纂された時代の反映であるとして、この記事の成立は、銀錢の禁止された和銅二年八月以前の成立と推定されているのであるが、弥永貞三氏は更に一步おし進めて、

更に蛇足を加えてみるならば、それよりもむしろ「三十」を「銀錢一文」に翻譯したのではないかということが考えられる。養老五年の銀錢と銅錢の法定比価は一当二十五であり、翌六年には一当五十になっている。「書紀」編纂の最終段階である養老四年頃一対三十位の比率で民間に通用していたのではないかということも考えられないことではない。⁽⁵⁾

と述べている。このように内田銀藏博士が書紀の編者の作文であるというにとどめることなく、更に進んで、この文章は書紀編纂時代の反映であるという田中卓氏弥永貞三氏の意見を一応卓見として認めることは出来るが、然し単にそれだけでなく、更に一步つき進んで考えることが必要ではないかと考える。

「粟斛三十」を「稻斛銀錢一文」としたことについて、先ず考えねばならないことは、何故に銀錢と書き改めたか

ということである。もっとも粟と稻とが同種のものであるかどうかについても考えなければならない点もあるが、粟は中国北部地方の食料品で米のことをいうものであるとして見て、ここでは一応同種のものとしても何故に、「三十」を「銀錢一文」としなければならなかったのであろうか。和銅年間当時において、物価の表示はどのようなようになっていたであろうかと翻って考えて見る必要があるであろう。

即ち和銅二年（七〇九年）三月甲申の条に

制、凡交関雜物、其物価銀錢四文已上、即用銀錢、其価三文已下、皆用銅錢⁽⁶⁾

とあって、銀錢は四文以上というように使用が限られて居り、又和銅四年五月己未には、

以穀六斗、当錢一文、令百姓交関各得其利。⁽⁷⁾

とし、更に又翌五年十二月辛丑の条には、

又諸国所送調庸等物、以錢五文、准庸一庸⁽⁸⁾

とあることによっても知られるとおりである。——ここにいう錢一文が銅錢であることはいうまでもない。——このように当時において物品の価格の表示は殆んど銅錢に限られていたことである。当時は銀の産出は対馬国においてのみであって、そしてその発掘がどのようにに困難と危険を伴ったことは対馬国貢銀記に見える。

其採銀之地極為險難⁽⁹⁾

ということによって知ることが出来よう。従って銀錢の鑄造量は極めて僅少なものであったことによるものと見て差支えないようである。

次に私が了解に苦しむのは弥永貞三氏のいわれているところの書紀編纂の最終段階である養老四年（七二〇年）に銀錢と銅錢の比価が一对三十位でなかったかということである。それは養老五年正月に銀錢一を以て銅錢二十五にあ

てたものが⁽¹⁰⁾、その前年には三十と比価があがっていることである。当時銀銭と銅銭の比価は変動が極りないものであったことは、翌養老六年二月には銅銭五十文となっていることでも亦当時銀の産出量が非常に少なかったことでもうかがい知られるが、養老四年に一对三十が翌年に一对二十五と銅銭の価値があがり、又その翌年に下るということはあり得べきこととは到底考えられないのである。

次に当時物品の価格の表示が銅銭に限られていたのを、何故に銀銭と殊更に書き改めたかということである。同時代の編纂されたものとしては矛盾したものといわざるを得ない。これはむしろ書記の編纂者が顕宗朝或はこれと遠からざる時代に銀銭が或意味において用いられていたことを聞いて知っておったからこれを「銀銭一文」というふうに書き改めたものと解釈するのが妥当であると考えられるのではなからうか。

私はこのように解釈して、一概に顕宗記を否定しきすることも出来ないし、少くともこれと遠からざる時代において銀銭が何等かの形において使用されていたのではなからうかと考えるものである。

(注)

- (1) 横山由清著「古代田制考」参照
- (2) 日本経済大典第一巻解題参照 尚これについては同博士著の「日本経済史」も参照せられたい
- (3) 内田銀蔵著「日本経済史の研究」上巻所収
- (4) 田中卓「銀銭」続日本紀研究一一九所収
- (5) 弥永貞三「奈良時代の銀と銀銭について」国民生活史研究二生活と社会経済所収
- (6) 続日本紀卷五(新訂増補国史大系第二卷)
- (7) 同 右
- (8) 同 右
- (9) 対馬国貢銀記(日本経済史大典第一巻)
- (10) 続日本紀卷八(新訂増補国史大系第二巻)

二、銀錢の伝来と用途

次に考えねばならないことは、当時の錢は我国において鑄造されたものかどうかということである。

その当時我国において銀は産出していなかった。銀が産出されたのは文献で見れば、天武紀三年（六七五年）三月庚戌朔丙申の条にある。

対馬国司守忍海造大国実、銀始出干当国、即貢上、大国授小錦下位、凡銀在倭国、初出干此時、故悉奉諸神祇亦周賜小錦以上大夫等。⁽¹⁾

であつて、又養老の雜令には

凡知山沢有異宝異木、及金玉銀彩色雜物処堪供国用者、皆申太政官、奏聞。⁽²⁾

として、山沢に金銀等があるのを知ったならばこれを国用に供することが堪うる限りは太政官に奏聞することとなっている。これらのことから考えると天武朝以前には日本として産出しなかったものと見てよいと思う。従つて日本書紀に見えるとおり、神功皇后紀（二〇〇年）十月に

仍賞金銀彩色及綾羅縑絹、載干八十艘船。⁽³⁾

とあり、又顯宗紀元年（四八五年）に

遂令金銀蕃国群僚遠近莫不失望。⁽⁴⁾

と見えることによつても、隣国の三韓から日本に将来されたもので、前述するところの銀錢もおそらくはこの時ともに伝えられたものではなからうか、これについては黒川真頼博士も

「稻斛銀錢一文」とある銀錢は、朝鮮より持ち入りしものなるべし。当時朝鮮の地は白銀多し。ゆえに銀錢を造りしならむ。中国には大古より銀をもって錢を造りしを見ず本邦において、後世銀錢を造ることも、おそらくは朝鮮に習ひしものならん。⁽⁵⁾

としているのである。

而してその形状がどんなものであったかということについても、今日は全然それを知ることが出来ない。古泉学者はこれは無文銀錢、又は銀玉がこれではなからうかといわれるが、今はそれも知るよしもない。これについて藤井深藪庵氏は

朝鮮にて使用せし銀貨なるものは銀玉なりとせば、日本に渡来せし銀貨なるものはこの形状のものならんとは推察できうる。⁽⁶⁾

としておられ、今日日本銀行においても朝鮮銀玉というのを所蔵し、やや扁平な球状で中央に穴があいているという。これは大安寺流記資財帳の「銀玉玖丸」というのがこれに相当するのではなからうか。大安寺は百濟大寺であるところからここに銀玉が所蔵されたとしても、それは当然なこととも考えられるし、殊に又大安寺は推古朝を下らざるときに草創されたので、この時より銀玉があったものと考えてもよからうか。

このようなことから推しても私はおそらくは銀玉と称するものがその当時の銀錢のことで、朝鮮から伝来したもので、これを我国で銀錢として通用したものではなからうかと推測している。

更にこの銀錢はどのような用途で使用されていたのであろうか。古来中国においては和田清氏も指摘しておられるとおり、⁽⁷⁾興販通商よりは主として顯貴富豪が驕奢の玩弄品として用いられたもので、洗兒錢、擲錢、撒錢、賭錢、厭勝、副葬品賞賜などに用いられており、彭信威氏の著わす中国貨幣史においても

至於白銀、在漢朝除武帝和王莽曾用作貨幣外、国内只用作一種寶藏手段。⁽⁸⁾

としており、又

南北朝明金銀、不但鑄成餅和錠、而且鑄成錢形。關於銀錢最早的記載、是後魏高祖者文帝之子汝南王悅散銀錢明故事。⁽⁹⁾

として撒錢のことを伝えている。中国でも西漢の時代以来主としては専ら銅錢が一般に用いられていたようである。これによって見ても、我国においても、銀錢は朝鮮より厭勝品として、又寶藏品として伝えられたものと考えることが出来るではなからうかと考える。

(注) (1) 日本書紀卷二十九(新訂増補国史大系第一卷)

(2) 令義解卷十(新訂増補国史大系第二十二卷)

(3) 日本書紀卷九(新訂増補国史大系第一卷)

(4) 日本書紀卷十五(同 右)

(5) 黒川真頼著「古量考」

(6) 藤井深蔵庵「貨幣」第二十八号

(7) 和田清「中国の金銀錢について」東洋学報大正十一年七月号

これについて加藤繁博士著の「庚宋における金銀の研究」も参照されたい。

(8) 彭信威著「中国貨幣史」上卷第三章晉到隋的貨幣

(9) 同 右

三、交換手段としての銀錢

私は更に進んで、我国においていつ頃から銀錢が交換手段として用いられたか、貨幣として本来の起源についても考えて見たい。

天武天皇十二年（六八四年）四月壬申条に

詔曰、自今以後必用銅錢、莫用銀錢。⁽¹⁾

と見え、ついで二日おいて、乙亥の条に

詔、用銀莫止。⁽²⁾

とある。これについてこの二つの詔は甚だしい矛盾を有するものとして、細川亀市氏は「上代貨幣経済史」において天武天皇十二年四月壬申の詔は「間もなく撤回せられて、再び銀錢と銅錢とが併せて流用するに至ったもの」⁽³⁾とせられているが、弥永貞三氏は銀錢と銀とを異質のものとしてとらえられているのである。⁽⁴⁾私は弥永貞三氏の方が一応当を得ているものと考ええる。このように銀錢が禁止せられたということは、銀錢の鑄造量も少なく、貨幣として適していなかったことに基ずくもので、この時代にすでにあらわれている「古和銅」といわれる銅錢が貨幣として流通していたものと考えることが出来るよう。

而してこれより二十四年後の天明天皇の和銅元年（七〇八年）五月になって、壬寅の条に

始行銀錢。⁽⁵⁾

とあって、この時に始めて銀錢が行われるに至ったとしている。天武天皇十二年以後和銅元年のこの時まで全く銀錢が使用されていなかったのではなからうかと弥永貞三氏は述べられているが、前述の古和銅が古泉学上和銅元年以前の鑄造となっている今日、天武天皇十二年以後多少なりとも銀錢が一部においては使用されていたものと見るべきであらう。

この時すでに令外官である鑄錢司が設置せられて、⁽⁶⁾錢貨の鑄造も軌道に乗ったものというべきで翌和銅二年正月壬申にいたり、

国家為政、兼濟居先、去虛就実、其理然矣、向者頒銀錢、以代前錢、又銅錢並行、比奸盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢、自今以後、私鑄銀錢者、其身沒官、財入告人、行濫遂利者、加杖二百、加役当徒、知情不告者、各与同罪。⁽⁷⁾として、銀錢を改鑄して銅錢とならび行ない、且つ銀錢の私鑄を禁じている。これは相當に銀錢が使用されるに至ったことを示すもので、同年の三月の甲申の条には前に述べたように物価が銀錢四文以上の時は即ち銀錢を用いることにし、その価が三文以下の時に皆銅錢を用いることとして、その使用について規制を加えてその流通をはかった政策ということが出来る。このような規制を加えることによって、銀錢の通用を制限しようと考えたものであろうが、銀銅の比価が定まっていな以上価値ある銀錢は依然として通用することが多く、私鑄錢はとどまるところがなかったので遂に同年の八月乙酉の条に

廢銀錢、一行銅錢。⁽⁸⁾

とし、更にその禁制を強めて三年九月乙丑には、

禁天下銀錢。⁽⁹⁾

に至ったものと考えても差支えないであろう。

このように、再三銀錢を禁じても、当時まだ厭勝品に用いられることまでも禁ずることは出来なかつたので、私鑄も決して減少したとは考えられない。この事は銀錢の「まがいもの」白鑄を用いることを禁じて、靈龜二年(七十六年)五月丙午条に

勅、大宰府百姓、家藏白鑄、先加禁斷、然不遵奉、隱藏賣買、是以鑄錢惡党、多奸計、速及之從、陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白鑄、搜求納官司。⁽¹⁰⁾

としている。このようにして銀錢が依然として流通したものと思われ、そして五年後の養老五年正月丙子の条には明

確に銀錢と銅錢の比価を定めて、

令天下百姓、以銀錢一、当銅錢二十五、以銀一兩、当一百錢行用之。⁽¹¹⁾

と、銀錢一對銅錢二十五としている。このことは一時銀錢を廢して銅錢一本の流通政策であつたのが、ここに銀銅二本建の政策に轉換したものと考えられ。而して翌六年二月戊戌条にる。

詔、市頭交易、元來定価、比日以後、多不如法、因茲、本源欲斷、則有廢業之家、末流無禁、則有廢業之侶、更量用錢之便宜、欲得百姓之潤利、其用二百銀、当一兩銀、仍買物貴賤、価錢之多少、隨時平章、永為恒式、如有達者、職事官主典已上、除却当年考勞、自余不論蔭贖、決杖六十。⁽¹²⁾

という詔をもつて、銀、銅の比価を改めて二倍としたのである。このようにして、銅の比価を下げて交易に便ならしめようとしたのでこれは、銅銀二本建政策を更に強行したものであるということが出来よう。

私はここに和銅、養老年間に至つて、銀錢が漸く流通機構に乗つて、その本来の機能を果す大きな任務を持つてきたものと考え。然し、このように流通した銀錢であっても、それが厭勝品玩弄品として用いられたことを否定するものではない。この事は法隆寺流紀資財帳か大安寺流紀資財帳に多く所藏されていることによつても、はるかに時代を下るものであるが空穂物語の一節にある。

左大將のおとゞ、あはれいかにして侍らん、はは宮こそはしだひし給つらめ、いとものきよらに心おはせし人ぞかしとみ給、かくてきばみたる一かさねに、こがねのぜに、一つゝみつゝみ、しろきしきしに、白かねのぜに、一つゝみつゝみ、しろきしきしをば、ことにうるはしくいださせ給、きばみたるをばおとなしく御せんともにまいり給つ、ごすぐろくはまありたる、あるじのおとゞ、いをとこゝにはさらになしとの給へば、みすのうちへさしいれ給つ。⁽¹³⁾

とあるのも、このことの傍証とすることが出来ると考える。

(注)

- (1) 日本書紀卷二十九(新訂増補国史大系第一卷)
- (2) 同 右
- (3) 細川亀市博士著「上代貨幣經濟史」第四章第二節銀錢
- (4) 弥永貞三「奈良時代の銀と銀錢について」(国民生活史研究所収続)
- (5) 日本紀卷四(新訂増補国史大系 第二卷)
- (6) 日本書紀 卷三十(新訂増補国史大系 第一卷) 参照
- (7) 鑄錢司について文武天皇三年十二月庚子にも「始置鑄錢司」ということがあるが、これについては拙稿「横浜商大論集」第一卷第一号にも述べているとおり、持統天皇の頃より組織された鑄錢司が文武天皇三年になって始めて、制度化されたと見るべきであろう。
- (8) 続日本紀 卷四(新訂増補国史大系 第二卷)
- (9) 同 右
- (9) 続日本紀卷五(同 右)
- (10) 続日本紀卷七(同 右)
- (11) 続日本紀卷八(同 右)
- (12) 続日本紀卷九(同 右)
- (13) 空穗物語、藏開上

四、むすび

以上述べたように、銀錢は西暦二百六十年頃より我国と三韓との交通が漸くしげくなるにつれて、金銀の将来とともに銀錢も伝えられたもので、我国に顕宗朝より遠からざる時代にすでに銀錢があったことを知ることが出来る。然しこの時期において銀錢はどこまでも、玩弄品、厭勝品として用いられたもので、この時代はまだ我国は自然貨

幣の時代であつて、まだ銅銭はなかつたものと考えられるのである。

このことは我国においても銀の産出があつて、漸く銀銭の鑄造がなされる時になつても、自然貨幣が通用してたと考えられ遣唐使の派遣などによつて唐との交通がはげしくなり、我国においても銅の産出によつてここに銅銭が鑄造せられるようになって、一時銅本位であつたのが、養老年間に至つて銀銅二本建となつて、漸くにして交換用具として貨幣の機能を持つようになったものと考えなければならないと思う。

(注) 横浜商大論集第一卷第一号の拙稿「奈良時代の錢貨政策」も併せて参照下されば幸と思う。尚養老期に後の銀銭についても考えなければならない点が多くあるが、この問題は後日稿を改めて考えて見たいと思う。